

江口正弘著

## 『天草版平家物語の語彙と語法』

「天草版平家物語」は中世末に来日したキリシタン宣教師の日本語学習のために、ローマ字、口語に書き改められ、一五九三年に天草学林から出版された本である。そしていまはロンドンの大英博物館にただ一冊だけ伝わっている世界の孤本といわれるものである。筆者は先にその大英博物館から、マイクロフィルムの頒布を受け、『天草版平家物語 対照本文及び総索引』（明治書院）を出版したが、本書はその研究編である。室町時代は古代語から近代語へ移行しようとする時代で、「天草版平家物語」は当時の数少ない口語資料として貴重である。

本書はその語彙研究と語法研究の両編とからなる。語彙編は索引作成者としての語彙の報告を主に、覚一本との比較、いわゆる大野法則といわれるものについての検討や、古典語の基本語彙についての試みを述べる。

語法編では、動詞については「連体形の終止形化」や「音便形」について、形容詞ではク活用・シク活用の統一、

などについて論じ、付属語では助詞・助動詞概説のほか、特に「仮定法の考察」「係助詞『こそ』」「副助詞『だに・さへ・すら』」について、国語史的視点から考察した論文を掲載している。

(笠間書院発行・三五二頁・一二〇〇〇円)